

DRAMA かながわ 66

神奈川県演劇連盟事務局：横浜市中区福富町西通り52（横浜演劇研究所内） Tel.045-261-4866



TAK IN KAAT

劇団河童座公演「藪の中」、「山月記～そして～」

風雲かぼちゃの馬車 第十一回本公演

「奇跡のシーズン 大洋ホエールズ伝 ー負け犬たちの1960ー」

文：神奈川県演劇連盟 副理事長 緑慎一郎




二年目を迎えたTAK IN KAAT。神奈川県演劇連盟が神奈川芸術劇場で公演を行う企画。去年は柿落とし公演の一つとして中小スタジオで「湘南・西相地区合同公演」と「あそびば」、ホールにて合同公演。神奈川芸術劇場で行う初めての公演ということもあり、神奈川演劇連盟として多くの喜びと感動、そして、問題点もありました。二年目の今回は中小スタジオを利用し、二団体が中心となり公演を行いました。劇団河

童座による「藪の中」・「山月記～そして～」、風雲かぼちゃの馬車「奇跡のシーズン 大洋ホエールズ伝ー負け犬たちの1960ー」。どちらも同じ舞台、客席を使用しながらそれぞれの特徴をしっかりと表現しました。さまざまな団体とのコラボレーションも観ているものに多く感動を与えました。神奈川演劇連盟と神奈川芸術劇場を繋ぐ、TAK IN KAAT。次はどんな舞台になるのか多いに期待していきたい。

TAK IN KAAT

劇団河童座企画「山月記・藪の中」 2012年 KAAT公演を終えて

劇団河童座 横田和弘



4月12日～15日にかけて、「山月記」《中島敦原作》
「藪の中」《芥川龍之介原作》(共に横田和弘脚色・演出)が、
KAAT(神奈川芸術劇場)で、上演された。
この公演は昨年の県演連合同公演(TAK IN KAAT)
を継承しての公演だった。柿落しの年の公演からの流れの
中、将来的にも恒例事業としての、春の神奈川県演劇連盟
週間と位置づけられる、意味ある公演となった。

作品として

横浜になじみある二人の作家の作品をテーマとした。
「山月記」は、芝居と太極拳・ダンスとのコラボレーション。
KAATの隣、中華学院の中に練習場を持つ日本一の太極
拳軍団とのコラボは、贅沢で、緊張と楽しみとが混じり合
う稽古場も含めて、ユニークな公演となった。アンケート
の評価も含め、好評であったのだが、特に観客席の多くの
太極拳ファンから、演劇って面白いとの声が多かったのも、
この企画の副産物として、嬉しかった。
「藪の中」は、黒衣パフォーマンスと、若駒のプロの殺陣
師を招聘しての殺陣を盛り込んだ芝居であった。怪我人続
出のハードな舞台であった。改めて、芝居は体が資本を感
じさせる稽古場だった。山月記は世界を相手にする飛び道
具が魅せる、派手な舞台だったが、演劇人にとっては「藪
の中のほうが好き」との声が多かったのは、二本立てにし
た冒険の意味が報われたと正直安堵した。

制作面について

集客は825名。河童座としては客演(特に太極拳のメン
バー)のおかげか、それなりの成果を上げることができた。
残念なのは公演ごとのバラツキが多く、140席のキャパ
設定のため、ソールドアウトの回と、空席のある回が出来た
ことだ。客席設定をうまくしていれば…との反省が残った。
KAATとの提携とのことで、入場料の15%、機材費
を含んだ会場費には恵まれた感が強い。しかし、1週間の
我々にしては長い劇場提供はありがたい反面、人件費など
の費用は、普段の公演よりは制作費がかさみ、収支はかろ
うじて赤字を出さない状態であった。照明・音響・舞台な

どスタッフは、さすがに外部の力を借りなくてはならない
ことも、制作的には問題が残ったようである。

舞台空間に関して

観客席作りからの舞台作りは、確かに厄介な作業であっ
た。もともと、中小スタジオや、アトリエは稽古場を意識
しての施設らしく、人手が多くかかる。それでも、次週に
使う「風雲かぼちゃの馬車」との最初からの計画の中、同
じ舞台空間を利用して…の成果か、連盟の助っ人も借り、
乗り越えることができた。
私的には魅力的な空間で、横浜で数少ないフリースペース
の劇空間としての存在は大きいと思われる。まだまだ可能
性のある空間との、感想を持った。

総括として

先にも書いたように、今回のTAK IN KAAT
(劇団河童座・風雲かぼちゃの馬車企画)は、柿落しのお
祝い公演ではなく、これからのKAATとの関係を見据え
てゆくための大切な意味を持つ公演であった。作品的にも
集客的にもそれなりの評価を得て、目的を果たした感があ
る。昨年の合同公演の流れか、連盟以外の客演も増え、
新しい合同公演の形も見え始めたように思われる。
しかし、今までのフィールドとは違い、劇場の仕組み、
ルールに戸惑うこともあった。仕込みなどスタッフワーク
に人数がかかり、やはり単独での公演は難しく、参加して
いない連盟の劇団の手助けが必要になることになった。確
かに、それをハードルと考えることもあるかもしれない
が、いろいろな面でのスキルアップを図れるとポジティブ
に考えるべきであると思う。
企画決定が遅れたこと、予定していた日程が、連れたこ
と。そして、テクニカルなこと。今回の公演の中ででた問
題は、KAAT側も県演連を理解してくれたようだし、
来年度は日程も空間も改善されるはずである。

最後に、KAAT側のスタッフは、館長をはじめ全ての
人たちが本当に親切だったことを書き添えておく。

奇跡のシーズン 大洋ホエールズ伝 負け犬たちの1960

風雲かぼちゃの馬車 西田 恵美

TAK IN KAAT

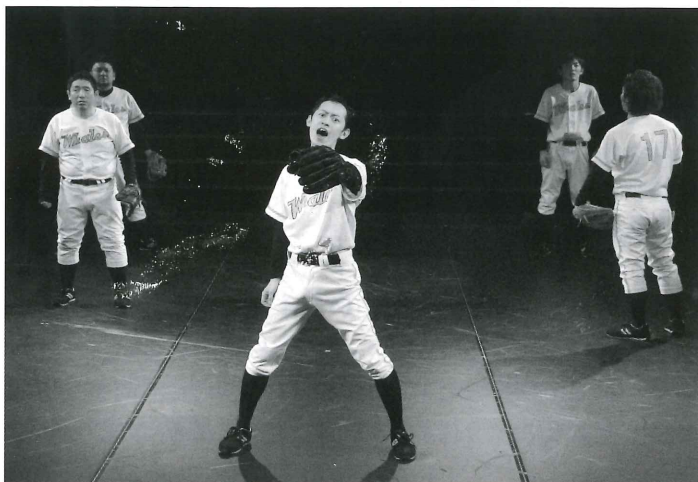
この公演を振り返るたびに、風雲かぼちゃの馬車があ
の神奈川で一番、いや日本で一番と言っても過言でない最新
設備の整った神奈川芸術劇場で本公演を行ったことは、
貴重であり、感動であり、素晴らしい経験であったと思
います。

またこの作品は風雲かぼちゃの馬車にとって初めて試
みた内容のものでした。今まで私たちが行ってきた内容は和、
洋問わずの時代劇が主でした。しかし今回チャレンジした
のはスポーツ劇、しかも野球を芝居にする、ということに
挑戦しました。最初役者の脳裏によぎったのは「ボールを
使わずに表現できるのか？」という疑問と不安です。さら
に我々がテーマに掲げている「歌って、踊って、人を斬る」
これをどこまで表現できるのか。不安がよぎる稽古初日は
なんと、集まったメンバーで野球！野球の楽しさを知った
役者陣はすぐさま野球にのめり込み、そして風雲かぼちゃ

の馬車の主宰であり演出家でもある土井によりこの芝居は、
歌って踊る芝居に生まれ変わりました。ただし今回は人を
斬るのはお休みでしたが（笑）最初の不安はどこへやら。
土井の演出は、役者の迫真の演技は、ボールがなくともど
こに転がっているか分かるほど。芝居中に生実況も入れ、
野球の試合も手汗握る本物の野球に近づけたと思います。
風の噂では、KAATのスタッフの皆様は、モニター室で
本番を見ている時、毎回どっちのチームが勝つか予想して
いたとか（笑）

さらに芝居の内容は、神奈川が誇るプロ野球チーム「横
浜DeNAベイスターズ」の前身、「大洋ホエールズ」の
実話をもとにしたものでした。実はこの作品、以前神奈川
演劇連盟50周年記念公演で行う予定の演目だったのです
が、50周年公演は参加人数が多いとのことで一度お蔵入
りになった作品なのです。しかしそれは一年以上温められ、
KAATという大舞台での公演が決まった時、再び
日の目を見ることとなりました。「負け続けていたチーム
が新しくやってきた優秀な監督のもと、それぞれの選手の
長所を伸ばし一致団結して優勝する」それは神奈川に住む
方たちに演劇で元気を取り戻す、そんなテーマを掲げたK
AATの公演にぴったりの演目だったと思います。

私たち風雲かぼちゃの馬車にとっても、役者のそれぞれ
の長所を伸ばし一致団結して、これからも最高のエンター
テイメントを作り続けていこうと、改めて決意した作品で
す。それが実現できているかどうか、皆様どうかこれから
も是非私たちの舞台を見に来てください！



TAK IN KAAT 観劇記

劇団河童座プロデュース・神奈川県演劇連盟 合同公演 「藪の中」 観劇記

劇団 蒼い群／村田次郎

4月15日（日）15時00分の部を観させていただきました。

今の世の中、殺人だ、事故だと、新聞・テレビで毎日のように報道されているように、何かしら目をおおいたくなることが、日々起こっています。そのひとつひとつに理由がありそれぞれ、怨念や憎しみがこもっている。

私達は多くが裁判員ではないから、いろいろ見ながら聞きながら、自分なりの考えを知らず知らずに偏見を持ちつつも、忙しくそのひとつひとつに対処させているような状

態だ。この「藪の中」というお芝居を観てそういった対処の仕方は正しいのかどうかという事を時にはふりかえってみるのも必要だなと感じた。殺人にかかわる登場人物の三者三様の言い分のうち、どれが真実なのか、それを探すことの意味は、どこにあるのだろうかと思ってしまう。ひとつには、私達は罰を与えることの為に物事を一方から見ようとしている、そういった、考え方の習慣から脱却をしなければいけないのではないだろうか、そういうことを感じさせてもらった“いい”お芝居でした。

芥川龍之介の同名の小説を生き生きと舞台上に表現されたものであり、検非違使をはじめとする役者、そして多くの黒子たちのチームワークの良さとテンポの良さを感じさせる、素晴らしい舞台であり、納得のいくものであった。

劇団河童座プロデュース・神奈川県演劇連盟 合同公演 「山月記 ～そして～」 観劇記

劇団 蒼い群／村田次郎

4月15日（日）12時30分の部を観させていただきました。

太極拳を始めとする演武、そして踊りに目をみはり、くぎづけにされてしまいました。三方から囲んだ客席の配置により、臨場感をひきだす工夫がなされていて良かったと思います。

お芝居の方も筋たてがはっきりしていてわかりやすかつ

た。特に人間性をどんどん失なっていく虎になってしまった男の深い悲しみが、とぎすまされた役者の感性や声から感じる事ができ、完成度の高い「語り」の世界になっていた。前半は憎しみに裏打された虎になった男の孤独との相克を感じたが、後半は妻の抱く愛の崇高さを感じた。前半で言われていた虎になった男の創作する「詩編に不足していたもの」とはこの「愛を感じることでできる人間性」にあったのではなかろうかと思う。人間とはなにもかも捨てても、得られるものを持つことでできる生き物であるということを感じさせられた1時間20分でした。

奇跡のシーズン大洋ホエールズ伝 ～負け犬たちの1960～ 観劇記

劇団葡萄座／荒木久美子

この劇中1960年には、私はまだ生まれていませんでしたが、川崎球場へは、小学校低学年の頃、野球好きの、そして大の巨人ファンの父に連れられてよく行きました。もちろん行くのは「巨人・大洋戦」。父の野球好き仲間の近所の小父さんやその子供たちと一緒に外野席でワイワイガヤガヤ。「センター前!」「ゲッツー!」「バッター三振!」どれも、懐かしい響きです。

本当の事を白状すると、その頃の私は、そして今でも、野球の事は余り好きではありません。ボールがあっちこちへ飛んで、それを捕まえに選手が走り回って。そんな目の前で繰り広げられている事も、大人たちが喜ぶから、一緒に喜び、嘆くと、一緒に嘆きました。巨人が勝つと大人たちの機嫌が良くなるので、それは家庭円満の秘訣でした。だから、一生懸命応援しました。懐かしい思い出です。

かぼちゃの馬車さんの今回の芝居、笑いあり涙あり、大変楽しく拝見させていただきました。可笑しくて、涙を拭き、感動して目頭を抑えました、今度はもちろんちゃんと意味が分かった上で。決して王、長嶋のような一流スターとは言えない、いわば二流な選手たちの、良いところだけを上手く使って、成功したら、誉めて、その気にさせて、本人達も練習に身が入り、やがて打撃の名手、守備の名手、走塁の名手に育てていく。三原マジック。そして、そんな風にして、元はやる気のない選手たちが、少しの事から自信を持ち始め、そして、いろいろなエピソードを経て、最後はチーム一丸となって、ついには「優勝!」。思わず手をたたき、私も一緒に喜びました。「やっぱり、勝つて好いな。勝ちたいな!!」そんな気持ちで客席と舞台が一緒になれた時間だったと思います。

私も、いっぱい色々あきらめている気がします。それは勝負の世界ではないけれど、あきらめないで前向きな時間を多く過ごせるように、これからは精進したいと思います。

2012年度 神奈川県演劇連盟総会



2012年度 神奈川県 演劇連盟 総会

京浜協同劇団 / 藤井康雄

「うたはよにつれ、よはうたにつれ」という言葉がある。しかしこれは何も歌に限ったことではなく演劇についても言えることだし、そもそも文化そのものが社会の中で醸成され育成されて成り立っている以上、今日における目覚ましい変化の渦中であって「県演連」は今後どうあったらいいのかが鋭く問われはじめた、と言えそうだ。

組織には必ず、そこへ求める要求があり、一定の目指す目標があり、それを果たす為の協同の行為が存在し、それら全体を保証する財政的な裏づけが可能となって初めて健全な発展が遂げられるものである。

県演連が産声を上げてから半世紀以上経過した。発足当初は地域に根ざした業余劇団（アマチュア劇団とも言っている）と職場演劇サークルが主たる構成メンバーでありその要求内容も、発表の場を求めるものであったり、劇活動に対する助成を求めるものなどであり極めてシンプルで分かりやすい実態であったと思う。

しかし、ここ十数年の活動は年々その幅を広げ、文字どおり目覚ましい活躍を果たしてきている。その要因はいくつかをあげてみると、先ず理事会が定例で開催されてきたこと。行政への要望活動を粘り強く継続してきたこと。職場演劇集団が消滅してから久しいがそれに変わって、書き手や演出者が中心となったプロデュース集团的意味合いの加盟がふえていったこと、などであろうか。

特に要望活動の成果は著しくて、7事業を展開している県演連の活動の中でもその5事業を占めているのである。（演劇博覧会 多目的ホール連続上演 加盟集団による合同公演 神奈川芸術劇場（KAAT）での合同、単独公演、資料室の充実）

当然矛盾もでてくる。大きくは文化演劇に対する助成をもっと増やして欲しいという要求には応えてもらえていないことだ。これは相当にきついことである。何しろ全てを基本的に独立採算でまかなうことが前提になっているからである。その他には特に50年、60年の歴史を持つ従来の地域劇団の活動にはそれなりのスタイルがあり、加えて自身の活動の継続そのものが困難さを抱えているということなどだ。

それらを象徴するようなことが今年度における連盟からの脱退と新加入である。脱退は劇団葡萄座、劇団川崎演劇塾、G/9 Project。新加入はヨコスカ・ベアフットシアター、H&Bシアター、ミュージカル・プロジェクトである。

3-3=0ではあるけれど内容は相当に変わっている。何に向かって何をなすべきか、足元をしっかりと見定めながら、今日に対応する県演連のあり方を改めて考える年になりそうだ。そんなことをしきりに考えさせる総会であった。



神奈川県演劇連盟合同公演
御存知遠山藤之丞一座 保土ヶ谷篇
～ 生んだはずだよ忠太郎 ～

原作・演出：濱田 重行 / 脚本：中村 俊夫 /
補色：三木 直史
会場：神奈川県立青少年センターホール

【前売料金】

- 一般：3,000円（当日料金は3,500円）
- 70歳以上 / 学生：2,000円（前売・当日共通）
- 小学生以下：1,000円（前売・当日共通）

【上演日時】（開場は、開演の30分前。全席自由）
2012年12月14日（金） 19:00～
2012年12月15日（土） 14:00～ / 18:00～
2012年12月16日（日） 14:00～

【お問い合わせ】

e-mail : info@yokohama1za.jp

編集長が斬る!

編集長が神奈川県演劇連盟を取材する連載企画

第3回 劇団河童座 屋井智里

「観察して観察して外側からなりきっていく」
劇団河童座は創立六十周年を迎える劇団。代表は神奈川県演劇連盟の理事長でもある横田和弘氏。
その河童座に長年所属して役者をやっていた屋井智里はどんな役者なのか。
彼女の考えていることを伺ってきました。

子供の頃から演劇を始めて

—演劇を始めたきっかけを聞かせてくれますか？

演劇をはじめたのは母が河童座員だったからです。小学生三年生の時に母に連れられて出たのが最初です。その時が河童座三十周年のお芝居でした。ちょうど今、河童座が六十周年だから三十年前です。ちなみに私の名づけ親は横田さん（現河童座座長）のお父さんです。最初は横田さんのお父さんに演出してもらっていました。

—芸歴が長いですね。子供の頃から演劇ですか？

うーん、でも、最初は「わー」とか「きゃー」とかアンサンブルの一人だから演劇している感覚はなかった。ただ、楽しんでいました。高校生ぐらいからかな？劇団に所属していると感じたのは。

—ところで屋井さんは河童座の中で演出もしていましたよね？

そう、やった。三作品ぐらいやりました。二十三歳の時に初めてやりました。基本的に河童座は横田和弘演出ですが、冬になると演出しない習慣が前はあったので（笑）、引き受けさせていただきました。

—演出をやってみてどうですか？

最初はホントにわかってなくて、苦しかったりしました。覚えているのは役者の目が怖かったこと。横田さんの試練がきつかった。役者が出来れば演出が出来るってことではないとよくわかりました。

—試練？

そうです。たまに見にくる横田さんが一番の試練でした。

役者 屋井智里として

—役者についてどう思っているか教えてください。

役者。役作りってあるじゃないですか。私は外側から入る人です。読んで読んで気持ちを固めてから演技とかは出来ない。サンプルを探したり、想像したりして、外側から雰囲気を作っていきます。特に河童座は動物とか子供が多いの。私はそういう役が多くて、だから、観察をよくします。観察して観察して外側からなりきっていく。動きを真似ることが役作りになっているのだと思います。

—様々な役やっていますよね？

うん、私、男でも女でもおじいちゃんでもおばあちゃんでも動物、子供、なんでもやっている。逆に普通の役がないかも。ほんとに年相応の役は稀です。やってないかも。

—演じたい役はありますか？

やりたいのは、悪い役。あ、あと、病弱とか幸薄い人。こういった役は横田さんの作品にあまり出てこないの。嫌われる役やりたい。落ちたおにぎりとか口に押し付けたりするとか…うーん、わかんない。だけど、狂った役、悪い役やりたい。

今後の“役者 屋井智里”について

—好きな芝居はありますか？

私、百本ぐらいの作品に出ていると思うの。その中から一本を挙げるのは難しい。あ、でも、二本目に演出したキネマの天地（井上ひさし作）は自分が出たくて持ってきたの。井上ひさし作品は好き。あと、ヘレンケラーも好き。演じた役の中でも大きく印象に残っています。

—これからの屋井智里は何をしたいですか？

何も考えてないなあ。今は無職だから職探しから始めます。

—ははは、演劇についてお願いします。

はは、そうだね。うーん、他の演出家さんの演出を受けて武者修行してみたいかな。横田さんの演出はもちろん知っているけど、他の演出を知らないからね。合同公演とかに参加したのも最近だし、もっと演技したい。

—最後にひとことお願いします。

劇団員募集しています！あ、あと、河童座代表の健康だけが心配です。しっかり健康管理してください！（笑）

屋井智里は芸達者だと僕は舞台を観て思っていました。小さな体からほとぼしるエネルギーは唯一無二な存在。跳ね回る姿はかわいらしく、演じることの楽しさを伝えてくれる役者。今回、じっくりと話してくれた彼女は今もまだ芝居を探求している。劇団で主役を演じ、演出を経験して、それでもまだ、新しい演出のもとでやってみることへの憧れ。彼女が六十歳になった時の子供役を見たい。きっと元気に演じていると確信しています。

DRAMAかながわ編集長 緑慎一郎



屋井智里 プロフィール

劇団河童座

1972年2,350gの可愛さで産まれる。その後大して成長せず、現在に至る。子供～お年寄り、人間以外…と殆どの世代の役を経験した。河童座女性人唯一のトラック運転&ロープ掛け係。行動や言動がおっさん臭いので小さいおっさん=セミおっさんと呼ばれている。

僕らの演劇

横浜小劇場

「家族の写真」

作:ナジェージダ・プトウシキナ 訳:大森雅子 演出:飯田克衛
4月28日・29日 於:関内ホール

長 い歴史に培われ、85回目の公演をむかえられたことに、何よりも頭が下がる思いです。

このロシア現代劇の題名を直訳すると「彼女が亡くなるまでに」だそうですが、クライマックスに合わせて、「家族の「写真」としたようです。老齡の母への思いやりから、何気なくついでにしまった嘘が、思わぬ展開になってしまうのですが、温もりのある幕締めへと自然に導いてくれました。

小生は演出部を担当していることもあり、自身への反省も含めて、私見として忌憚なく感想を述べさせていただきますので、ご容赦ください。



(1) 時代設定は、30年ぐらい前のロシアのようですが、上演許可との関係で難しかったかも知れませんが、現代の日本に場を移したほうが、時代考証の面からも違和感

がないように思いました。(例を挙げますとダイヤル式電話の時代に、最後の記念写真を撮る場面でのデジカメ?)

(2) 登場人物が少なく一場ということもあって、会話劇にならざるを得ません。役者がもう少し動くことも必要でしょうし、台詞がかみ合わないところがあり、折角の笑いがとれないのが残念に思いました。

(3) 所作では、スープをあの様に飲んでほぼれてしまいますし、ローソクの移動は手を翳さないと火が消えてしまうのでは?と気になりました。

(4) 照明ですが、観客の目をそらさないためにも、必要のない場所は、絞った方が良いのではないのでしょうか。役者も大変そうでしたが。

会場には、劇団の関係者や先輩とお見受けする方々が観劇されていたようです。懐かしいように挨拶を交わされている姿に、横浜小劇場の宝物を見る思いがいたしました。

劇団こゆるぎ座 楠田正宏

劇団やぶさか

「千夜一夜物語～蒼き精霊の冒険譚～」

作・演出 海老原あい 4月28日～30日 於・シルクロード舞踏館

狭 い階段を下りると、そこは小さな会場で壁際に客席が作ってあります。見渡したところ、セットらしいものはなくて袖もなさそう。何より一番驚いたのは、衣装をつけた出演者たちが舞台上でくつろいでいることです。



こういのはどうなのだろう、となんとなく「?」が取れないまま、会場が暗くなっていきます。

再び舞台に明かりが入った時、そこはもう

アラビアンナイトの世界でした。それまでの緩い空気は一瞬で吹き飛び、なんだか危険な匂いのする女鬼神が妖艶に踊っています。舞台は本当に小さいのに、はたためく布で風や空や波や海を、それはみごとに表現していて、現実には舞台の上の役者たちの立っている場所はたいして変わらないのに、なんだか見ている自分までとても遠くまで旅をしたように感じます。

ファンタジーや人間ではない者を舞台に登場させるのは難しいと思うのです。精霊たちは人間と違う事ができなければいけないし、現実には起こり得ないことが起こるのですから。舞台の上で、いかに無限で自由かということを見せてくれると感動します。これはきっと私が舞台に関わる人間だからなのですが、生身の人間しかいない場所で、できないことなど一つもないと感じられるのは、とても誇らしい気分になります。

男性役を女性が演じると、どうしたって無理は生じますが、今回のようなファンタジーには線の細いキレイな男がふさわしく、残念ながら現実の男性はそんなに美しくもないと思いますから、ちょうどいいように思いました。

始まる前に感じた細かい「?」は芝居を見ている内にすっかり消化され、気持ちよく会場を後にすることができました。不可能を可能にする舞台をこれからも期待しています。

劇団麦の会 池浦典子

京浜協同劇団

『臨界幻想』 作・ふじた・あさや 演出・内田勉

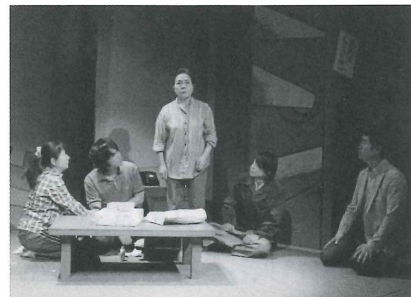
6月8日～10日・15日～17日 於・スペース京浜

物 語は一人の電力会社勤務の青年・暁生が、若くして亡くなってしまふところから始まる。

これは30年も前に書かれた物語で、改稿した台本もあったそうだが、あえてほとんど30年前のままで上演したという。私は見ていてまったく違和感はなかった。単位こそ現在用いられているシーベルトではなかったが、安全基準の引き下げや下請け労働者の扱い、情報操作、原発によって利益を得る人々など、それぞれの抱える問題は、現在の福島で起きた原発事故によって私たちが直面している問題と切り離して考えることができない。

暁生にどのようなことがあったのか、職場での業務や起こってしまった事故、婚約者フミとの間に起きたことなど、

彼を知る人たちの証言によって母親が知っていく。少しずつ明かされていく過程でそれぞれの心の動きが丁寧に表現されており、特に母親の子を思う気持ち、心配をかけまいとする子の気持ちが、深く心に残った。



上映時間は約2時間。途中休憩が10分間挟まった。その間、展示スペースでこの公演についての新聞記事や脱原発を訴える方の記事など公演に関連した展示があり、より訴えたいことが明確にでき、後半の展開に集中しやすくなる効果を感じられた。

脱原発と東北の方々への激励の思いを持って岩手県西和賀町の銀河ホール地域演劇祭参加を決意された劇団の皆さんのさらなる熱演が期待される。劇団やぶさか 浅水真子

劇団かに座

「見果てぬ夢」 作・堤泰之 演出・馬場秀彦

6月15日～17日 於・かなっくホール

舞台はとある病院の中庭。ストーリーが進むにつれ、各々の人間模様が見え隠れするのが興味深かったです。

特に病名を中々妻に明かせず苦悩する西岡健と、妊娠中で夫の状態に薄々感じ始めていて不安になる妻京子の二人の姿がとても切なく印象に残りました。家族のある者には自分だけが病気で苦しむのではなく家族も同じく苦しみを闘っているのだと、独り身の私にも痛いほど伝わってきました。その他にも、芝居の公演に自分の役に別の者の出演が決まった事を知り、自暴自棄になる飯尾を必死で励ます劇団員仲間の羽生田。普段はケンカばかりしているが、父郷田忠士の容体を心配している息子の啓一郎。病気等で苦悩する人たちに対して家族、仲間、そして病院の医師、看護師の方々の支え合う姿がよく表現されていました。



今回の芝居を通して、日常の生活では、自分が今生きている事に関して当たり前のように感じてしまいがちですが、その事が自分だけでなく家族、友人、その他大勢の方々にとってどれほど大切なことかを考えさせられました。夢と

いうと、「役者になりたい」といった目標を叶える事も大事ですが、逆境に立たされても生きる糧になる事が大事なのかとも思えてきました。かに座さんの芝居創りのテーマである「生きる」がとてもよく表現されていました。

最後に余談ですが、劇団員の飯尾が芝居の練習相手として、看護師長の武とのシーンがとても面白かったです。飯尾に負けじと相手役を熱演する武のからみ合いには笑わせてもらいました。次回作も期待しております。

劇団河童座 大木崇

劇団麦の会

「温泉旅館湯けむりの里～親はなくとも子は育つの巻～」

作・演出/山口雄大

6月23日・24日 於・横浜市泉区民文化センター テアトルフォンテ

今年、創立65周年になる劇団麦の会の初夏の公演。みなと・横濱・笑劇場しりーず★第五弾「温泉旅館湯けむりの里～親はなくとも子は育つの巻」を観てきました。

テアトルフォンテで迎えてくれたのはとびっきりの笑顔の仲居さん達。幕が上がると、背景の上面には大きな富士山と太陽があり、全体が唐草模様で華やかな温泉旅館の客室がメインの舞台セットでした。

オープニングは総勢10名程の仲居さんによる口上。物語は温泉旅館で働く娘を心配した父親が新人仲居に化けて娘の生活を探るというもの。面白いところもあったし、やりたいことも分かったけど、ツポにはまらないのは、微妙にタイミングがずれていたり、力が入ってしまってたからかな。私も笑いを取るのが苦手な役者なので大きなことは言えないが、笑いを取ろうと考えるあまりに空滑っている箇所が多々あったように思う。



それでも役者の方々が楽しそうに演じていて、創立65周年のパワーを感じる舞台でした。笑劇場しりーずとのことで、笑いだけを突き詰めたシリーズなのかもしれないが、せっかく父と娘の愛情がメインの物語なのだから、もう少し父娘の感動があっても良かったのではないかと思います。

趣向が違うといえばそれまでだが、喜劇というには切ない…長いコントを観ていたかのような感じで終わってしまった。私としては、以前に拝見した「駅」や「夏の扉」の方が良かった。また次回に期待したい。

演劇プロデュース『螺旋階段』 田代真佐美

神奈川県演劇連盟加盟団体(50音順)

- H&Bシアター●演劇プロデュース『螺旋階段』●京浜協同劇団●劇団蒼い群●劇団河童座●劇団かに座●劇団こゆるぎ座●劇団麦の会●劇団やぶさか●劇団横綱チュチュ●劇団よこはま壱座●風雲かぼちゃの馬車●まりこ☆みゆーじあむ●ミュージカルプロジェクト●横須賀市民劇場プロジェクト●ヨコスカ・ベアフットシアター●横浜小劇場

神奈川県演劇連盟HP: <http://kenenren.org/>

DRAMAかながわ[第66号] 発行日:2012年9月30日 発行:神奈川県演劇連盟
編集:緑慎一郎(演劇プロデュース『螺旋階段』)・浅水真子(劇団やぶさか)・海老名信吾(劇団よこはま壱座)・関口素実・山元洋一(外部協力)

※お詫びと訂正:65号8ページ目右段の記事執筆者名が劇団「横綱チュチュ」伊藤俊之と表記されておりますが、正しくは劇団かに座 金野充行です。お詫びして訂正いたします。